

今月は内容がとても多いです。四週ありますが、一週ごとに7個の主題があります。私がそれをすべて知ることもできず、皆さんに伝えることも難しいです。今回の10月は、最初の一課にある「変えること」の内容についてだけを話します。

## 「変えること」

その一つ目が山上の垂訓のメッセージです。

### マタイ 4 章 19節

イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」

旧約聖書も神様のみことばであり、福音が含まれている神様のみことばです。旧約聖書では、何を与えられたのでしょうか。律法を与えてくださいました。その律法をすべて守れば生きるということでした。しかし、人間はどんなに熱心にして、努力しても、律法をすべて守って救いを成し遂げることができる存在ではないということが、旧約聖書の最後にまで暴露されて、旧約聖書の幕を下ろします。人間の熱心さと努力では、できないということです。不可能だということです。そして、神様の新しい契約の実体であるイエス・キリストが来られたことによって新約が開かれます。そのようにして来られたイエス様は、ヨハネにバプテスマを受けられ、聖霊の導きによって荒野で悪魔の試みも受けます。そして、弟子を呼ばれて、いよいよ本格的な公生涯を始められます。その公生涯を始めながら、一番最初にされたことは何だったのでしょうか。

マタイ 4 章 23節から 25節を見ます。

23 イエスはガリラヤ全域を巡って会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病、あらゆるわずらいを癒やされた。

24 イエスの評判はシリア全域に広まった。それで人々は様々な病や痛みに苦しむ人、悪霊につかれた人、てんかんの人、中風の人など病人たちをみな、みもとに連れて来た。イエスは彼らを癒やされた。

25 こうして大勢の群衆が、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、およびヨルダンの川向こうから来て、イエスに従った。

いろいろな病気になった人を癒やされ、悪霊につかれた人も癒やされました。ガリラヤ周辺のすべての村に、さらにヨルダンの向こう岸の村までも、うわさが広がりました。数多くの群衆がイエス様に従おうと集まって来ました。始まりから、韓国式表現で言うなら、それこそ宝くじに当たったように大当たりです。それが私たちが望んでいることでしょう。病気の人々が癒やされて、さまざまな奇跡が起こり、教会が大きく復興します。しかし、それは単純な奇跡を行ったものではありませんでした。神の国の本質についての宣言をされたのでした。

23節の「御国の福音を宣べ伝え」ということばに注目してください。善悪の知識の木の実を取って食べたアダムの以降、すべての人類は罪と死の律法の下に置かれるようになりました。その死が明らかにはっきりあらわれる症状、目に見える症状で現れたのが、さまざまな病気で苦しむ人、そして、悪霊につかれた人、中風の人として出て来たのです。イエス様が御国の福音を宣べ伝えられ、すべての病気とすべての弱さを癒やされたということは、罪と死の問題を解決して、い

のちの御霊の律法で生きる神の国、すなわち、天国を完成する働きをするために来たことを見せてくださったのでした。単純に病を癒やして、悪霊を追い出すために来られたのではなく、すべての病と、すべての弱さを癒やされる奇跡を行うということは、結局、御国の福音に関することだということを見せているのです。その癒やしを受けた者は、何か特にイエス様の前に立派な事をしたので癒やされたものではありません。ただ価なしに恵みによって癒やされたのです。天国はそうように与えられるということです。

ところが、そのように集まった数多くの人々は、それを聞き取ることができませんでした。神の国、天国はこのようだと見せるために行われた奇跡なのに、人々は目に見える現象、そのまま、その奇跡だけに関心を持っていたのです。それは、どのように分かるでしょうか。その数多くの人々が、本当に御国の福音を聞くために集まっていたならば、イエス様は、とても喜ばれて、その場で続けて御国の福音を宣べ伝えられたでしょう。それか、さらに多くの人々が集まることができる平地に移動されたでしょう。三つの庭がよく備えられた、ものすごく大きい教会を建てられたでしょう。しかし、そのようにはされませんでした。群衆は、分からなかったということでしょう。

それゆえ、弟子だけ別に連れて山に登られました。その弟子にだけ、もう一度、天国はこういうものだと言明をされたということです。それが、山上の垂訓のみことばです。

## マタイ 5 章 1 節

その群衆を見て、イエスは山に登られた。そして腰を下ろされると、みもとに弟子たちが来た。

この山上の垂訓を、多くの人々が、祝福を受けるための秘訣だとか、この地でどのように生きるべきか、どのように生きて行くべきかという程度の、道徳的、倫理的な行動規範（ルール）としてだけ見えています。しかし、この山上の垂訓は、人間の行為や資格とはまったく関係なく、すでに黙示の中で完了された神の国が、どのように神様が選ばれた民に与えられるのかについての説明です。それが救いです。聖書全体がこの話をしているのです。

当時のユダヤ人は、まだ旧約的な思考観念に捕われています。彼らが持っていたメシア観はどんなものだったのでしょうか。ただ自分たちの民族、イスラエル民族の解放と救いをもたらす力がある王だという程度でメシアを考えていて、それを待ちこがれていました。そして、ローマの圧制から抜け出して、メシアを王にした政治的、軍事的力がある国、そのような王国を天国だと自然に考えていたのです。自分たちの必要を満たしてくれるメシア、自分たちの望むすべてがそろっている天国、そのために熱心に律法と祭りを守って、神様に仕えていました。イエス様は、そのようなひとびとに、まことの天国がこういうものだと言明をされたかったのでしょう。しかし、群衆は聞き取れなかったので、弟子を別に連れてみことばを伝えられたのです。

今週の主題が「変えること」でしたが、今日、私たちがこの山上垂訓のみことばを通して変えなければならないことは、神の国、天国がどんな所であり、神の国の生活がどういふことなのかを正しく悟らなければならないということです。私たちの考え、思想を変えなさいということです。しかし、（先ほどの働き人のみことばでもあったように）私たちが変えなければならないからといって変えられることができるものではありません。神様が選ばれた民を、神様がそのように変えてくださるでしょう。

この山上の垂訓は、イエス様が神の国の基礎をもう一度説明しておられるのです。それゆえ、この山上の垂訓の最後の教えが、岩の上に建てられた家、砂の上に建てられた家で、基礎についての話で締めくくられます。山上の垂訓の内容を

ほんとうの意味を具体的に见たいのですが、内容が本当に多いです。時間もあまりありません。私が3年ほど前に、この山上の垂訓、マタイ5、6、7章の3章だけ語ったのですが、およそ4か月かかりました。内容を具体的に一つ一つ知りたいた方は毎日広島に来てください。ティラノの講堂で語られたように、毎日してこそ語ることができる内容なので。それゆえ、今日は、一番最初の部分と最後の部分だけを簡単に見てみます。

今まで語ったように、この山上の垂訓は、神の国、天国のことについて語られています。ですから、最初も神の国で始まります。

マタイ5章3節だけ読んでみましょう。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。

天の御国、神の国についてです。このように、12節まで8つの幸いについての内容が始まります。前の部分だけ見ましょう。「心の貧しい者は幸いです」「悲しむ者は幸いです」「柔和な者は幸いです」「義に飢え渴く者は幸いです」「あわれみ深い者は幸いです」「心のきよい者は幸いです」「平和をつくる者は幸いです」「義のために迫害されている者は幸いです」

このみことばは、このような者になってこそ、幸いな者になって、天国に入って、慰めを受けて、地を受け継ぐというみことばではありません。

皆さんが考えている幸いの概念とは、あまりにも違うでしょう。貧しくて、悲しく、飢え渴いて、苦しみを受けるのが幸いなら、皆さん受けたいでしょうか。受けるでしょうか。私も悩みます。これは、それぞれ個別的に幸いを受ける秘訣についてのみことばでなく、「幸いな者よ！」で始まる、感嘆文であり、宣言文なのです。原語的に見れば、「幸いな者よ」と宣言して始まります。3節だけ原語に忠実に翻訳をすると、このようになります。

「幸いな者よ。あなたたちは心が貧しい者だ。天の御国があなたたちのものだからだ」

このように翻訳をするのが正しい翻訳です。すでに創造の前から神の国の幸いを受けた者が、この地で生きる中で経験することを語っていて、自分で自分に対する自己認識が、「私は心の貧しい者であり、悲しむ者であり、柔和な者なのだ」と告白するようになるということです。事実、そのような生き方は、イエス様が先に生きられた生活です。ですから、ここで話している、幸いな人々は、この歴史の中でイエス様の生き方と連合して、イエス様の生き方をそのまま従って生きようになることを語っているのです。イエス様の生き方は、一言でどんな生き方でしょうか。自分を否定することと十字架です。イエス様が先にそのように生きられると言われたのと同時に、そのイエス様と連合した者の生き方、つまり弟子の生き方が、そのように生きなければならないと要求しておられるのです。

では、このように「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです」から始まった山上の垂訓のみことばは、山から降りられる前の最後のみことばにも、このようになっています。

マタイ7章21から23節です。

21 わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。

ひとまず 21 節で、「わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく」と天の御国の話をしておられます。

そして 22、23 節

22 その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』

23 しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』

このみことばに引き続き、岩の上に建てられた家、砂の上に建てられた家の話をしながら、山上の垂訓が終わります。このように、天国の話から始まり、天国の話で終わるのが山上の垂訓です。

ところで、この最後に記録されたこのみことばを、よく注意して見てください。弟子だけを連れて山に登って山上の垂訓のみことばを宣言される前、イエス様が行われた事です。「様々な病や痛みに苦しむ人、悪霊につかれた人、てんかんの人、中風の人など病人たちをみな、みもとに連れて来た。イエスは彼らを癒やされた。」ところで、今この 7 章でも、そのような全く同じことを人々がしていますのです。先ほどお話したように、イエス様がなさったそういう行いの中には天国を説明するための本当のみこころが含まれていました。しかし、人々は表面的なことだけを見て誤解をしていました。

「あ、このような事を行えるのが神の国なのだ」または、「このようなことをすれば神の国に入ることができるのだ」そのように考えて生きていたのです。神様のみこころと関係なく、自分たちの判断と考えて生きるのです。それが「罪」です。そこで、21 節の最後の部分に、「神様のみこころを行う者が天の御国に入る」と言われたのです。神様のみこころどおりに行わないことが、罪だということです。もう少し強く話せば、それがサタンです。

マタイ 16 章で、イエス様をキリストとペテロが告白しました。しかし、その後、イエス様が初めて十字架について死んで復活することを語られました。その話を聞いたペテロは、今キリストを告白したばかりなのに「そんなことがあなたに起こるはずがありません」と言います。そのとき、そのようなペテロにイエス様が何と言われたのでしょうか。「下がれ、サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」マタイ 7 章 23 節でも、「わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け」と言われました。それなら、7 章 21 節で言われた「神様のみこころを行うこと」、そして、16 章で言われた「神のこと」というのはどういうことでしょうか。二か所のみことばを読んで終えます。

ヨハネ 6 章 28～29 節と、40 節です。

28 すると、彼らはイエスに言った。「神のわざを行うためには、何をすべきでしょうか。」

29 イエスは答えられた。「神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです。」

40 わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持ち、わたしがその人を終わりの日によみがえらせることなのです。」

神様のわざ、神様のことは、イエスを信じること。神様のみこころは、御子を信じること。簡単でしょう。

この山上の垂訓のみことばは、私たちにこのように守りなさい、あのように守りなさい、それでこそ幸いを受けると与

えられたみことばではありません。上着<sup>うわぎ</sup>を求める者<sup>もと</sup>に下着<sup>もの</sup>も与<sup>した</sup>げなさい。皆<sup>みな</sup>さん、だれが皆<sup>みな</sup>さんに服<sup>ふく</sup>をくれと言<sup>い</sup>ったところ、下着<sup>したぎ</sup>までを脱<sup>ぬ</sup>いで与<sup>あた</sup>えたらそれを着<sup>き</sup>ますか。ちょっと変<sup>へん</sup>でしょう。着<sup>き</sup>ている下着<sup>したぎ</sup>をあけるのを喜<sup>よろこ</sup>ぶ人<sup>ひと</sup>がどこにいるでしょう。右<sup>みぎ</sup>の頬<sup>ほお</sup>を打<sup>う</sup>たれたら、左<sup>ひだり</sup>の頬<sup>ほお</sup>も向<sup>む</sup>けなさい。右<sup>みぎ</sup>の頬<sup>ほお</sup>も打<sup>う</sup>たれて、左<sup>ひだり</sup>の頬<sup>ほお</sup>も打<sup>う</sup>たれなさいといわれて、頬<sup>ほお</sup>を向けることができるでしょうか。私<sup>わたし</sup>はできません。また、山<sup>さん</sup>上<sup>じょう</sup>の垂訓<sup>すいくん</sup>の内容<sup>ないよう</sup>の中には、盗<sup>なか</sup>んではならない、姦淫<sup>ぬす</sup>してはならない、ほかの人<sup>ひと</sup>を批判<sup>ひはん</sup>してはならないと、いろいろあります。そのほかにも多<sup>おほ</sup>くの話<sup>はなし</sup>がありますが、皆<sup>みな</sup>さんの考<sup>かんが</sup>えと観<sup>かん</sup>点<sup>てん</sup>を変<sup>か</sup>えてみことばを再<sup>ふた</sup>び黙想<sup>もくそう</sup>してください。私<sup>わたし</sup>たちに何<sup>なに</sup>か行<sup>おこな</sup>うことを要<sup>よう</sup>求<sup>きゅう</sup>する内容<sup>ないよう</sup>ではありません。私<sup>わたし</sup>たちの不<sup>ふ</sup>可<sup>か</sup>の熱<sup>ねつ</sup>心<sup>しん</sup>や努<sup>どり</sup>力<sup>りき</sup>を破<sup>やぶ</sup>って壊<sup>こわ</sup>して、ただ単<sup>たん</sup>に信<sup>しん</sup>じて「わたしがすべてした」と主<sup>しゅ</sup>が語<sup>かた</sup>られることを受<sup>う</sup>けるのです。「単<sup>たん</sup>にわたしを信<sup>しん</sup>じて、わたしが生<sup>い</sup>きた生<sup>い</sup>き方<sup>かた</sup>を、あなたがたも生<sup>い</sup>きるようになるので、ついで来<sup>く</sup>れば良<sup>よ</sup>い」と言<sup>い</sup>われるのです。自分<sup>じぶん</sup>を否<sup>ひて</sup>定<sup>い</sup>し、十<sup>じゅう</sup>字<sup>じ</sup>架<sup>か</sup>の生<sup>い</sup>き方<sup>かた</sup>。それ<sup>それ</sup>は、簡<sup>かん</sup>単<sup>たん</sup>ではありませ<sup>ん</sup>。しか<sup>し</sup>、先<sup>さき</sup>にそ<sup>そ</sup>の道<sup>みち</sup>を行<sup>い</sup>かれた主<sup>しゅ</sup>が、私<sup>わたし</sup>たちとともにおられ、私<sup>わたし</sup>たちにそ<sup>そ</sup>うな生<sup>い</sup>活<sup>かつ</sup>をするようにさ<sup>さ</sup>れるのです。です<sup>す</sup>から、だ<sup>だ</sup>から私<sup>わたし</sup>たちに必<sup>ひつ</sup>要<sup>よう</sup>なのは信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>だけ<sup>だけ</sup>です。事<sup>じ</sup>実<sup>じつ</sup>、そ<sup>そ</sup>の信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>も神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>が贈<sup>おく</sup>り物<sup>もの</sup>としてく<sup>く</sup>ださ<sup>さ</sup>ったのです。

のこ 残<sup>いっしゅう</sup>りの一<sup>いっしゅう</sup>週<sup>かん</sup>また、10月<sup>がつ</sup>1か月<sup>げつ</sup>間<sup>かん</sup>、イエス・キリスト<sup>しん</sup>を信<sup>しん</sup>じる信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>だけ<sup>も</sup>を持<sup>い</sup>って生<sup>みな</sup>きる皆<sup>みな</sup>さんになるように祈<sup>いの</sup>ります。

いじょう 以上<sup>いじょう</sup>です。あ<sup>あ</sup>りが<sup>が</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>ご<sup>ご</sup>ざ<sup>ざ</sup>い<sup>い</sup>ます。